

選択可能な未来へ向けて、 私たちにできること

山本太郎

（長崎大学熱帯医学研究所
国際保健学分野・教授）

できる限り外出を控え、机に向かう毎日が続いていました。いま、何を考え、何を為すべきか。コロナ終息後の世

界はどうあるべきか。人はそこで何を大切なものと考え、大切なものを抱きしめるため、どう生きていくのか。さまざまな本を読み、なかにヒントを探す。そんなことをやっています。

そんな時間を過ごして夕方になると、頭の芯が真空のなかで宙吊りになったような奇妙な感覚を覚えます。人出の少ない日暮れを待って、川沿いを走ると、目の前の山が海を抱く、古く華僑の人々が「周抱海」と呼んだ港に灯火が揺れるのが見えます。夜空を見上げると、かすかに星の瞬きが見えるのです。

二〇一〇年一月ハイチで地震が起きた時、支援に入った首都ポルトープランスで見上げた夜空や、二〇一一年三月に起きた東日本大震災の際に三陸沿岸の街、大槌町でみた星空が脳裏によみがえってきます。震災の爪痕が深く刻まれ、それによって一切の明かりが失われた大地と、その上に輝く星々。それはそれまで見たどの星空よりもきれいでした。

星空を見ている間にも、余震は続き、大地の身震いが続きます。再び朝が来るかさえ確信が持てませんでした。でも、確実に夜明けはやってきました。東の空が赤く染まり、群青色した海が青くその色を変えていきます。その時、私は、明けない夜はないことを知りました。

医師であるといっても、直接、患者の治療にあたっているわけでもなく、研究者であるといってもワクチンや治療薬の開発を行っているわけでもない私にもできることは、何か。いまある現実を直視し、来るべき未来を想像することだろうと考えます。そんな話を少しだけ。

コロナ後の世界 選択可能な未来へ向けて

一四世紀にヨーロッパで起きたペストの大流行は、ヨーロッパの人口を三分の二にまで減少させました。それは、教会を主体とした社会から国民国家への転換点となりました。今回の新型コロナウイルスの汎世界的流行（パンデミック）も、私たちの社会を変えていく可能性は高いと思います。問題は、それがどのような社会になるかということだと思っています。

個人的には、コロナ後の社会が、情報技術を主体にした社会へと転換することは間違いないことだと思っています。しかし情報技術はあくまで道具であって、目的ではありません。それをどのように使うかは、みなさん一人ひとりが考えるべき問題なのです。

その時に大切なことは、明日への「希望」だと思います。

私は、二〇年以上も前に、アフリカでエイズ対策をしていたことがあります。現在のような治療薬はなく、予防が唯一私たちにできる対策でした。毎日、村から村へと回り、感

染予防の重要性を説くのです。しかし、それがなかなか上手いかないのです。ある日、一人の青年が私に言いました。「一〇年後に生きている保証はないじゃないか。エイズじゃなくても飢餓とか暴力とか、戦争で亡くなっている。今、エイズ予防をする意味はあるのか？」と。

対策がうまくいかなかったのは、彼／彼女らの理解が足りなかったわけでも、私たちの説明が悪かったわけでもありませんでした。彼／彼女らが、一〇年後の自分を想像できなかったからだったのです。そうした現実を前に私たちは狼狽し、動揺しました。

社会がどうあるか、どう変わっていくか、どういう希望のもとにあるべきか、というのは、一人ひとりの心の中にしかないものだと思います。一人ひとりの希望が合わさって、未来への希望につながっていくのです。言葉を換えて言えば、選択可能な未来は私たちのなかにしかないということかもしれません。

多くの災厄が詰まっていたパンドラの箱には、最後に「エルピス」と書かれた一欠片が残されていたといえます。古代ギリシャ語でエルピスは「期待」とも「希望」とも訳されます。パンドラの箱を巡る解釈は二つあります。パンドラの箱は、多くの災厄を世界にばら撒いたが、最後には希望が残されたとする説と、希望あるいは期待が残されたた